

PROCESSIO PALLENTIUM

蒼白者の行進

中井英夫



筑摩書房

蒼白者の行進

一九七六年十一月三十日 第一刷発行

著 者 中井英夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一―七六五一(代表)

〒101―91 振替東京六―四二二三

咄印刷・鈴木製本

蒼白者の行進

蒼白者の行進

序 章

月蝕の狙撃者 8

恋するアンドロイド 12

透明な手錠 23

漂う骨たちの対話 29

「ここでは何も起らない」 34

毒草園の朝食 43

第一章

アルテミスの遠矢 52

無言者、もしくは蛇の婚 72

凍りついた王国の中で 92

仮面者の登場 114

第二章

ソドムの回廊 130

ゴモラの城館 154

黒い谷の底で 169

デウオランは飛翔したか

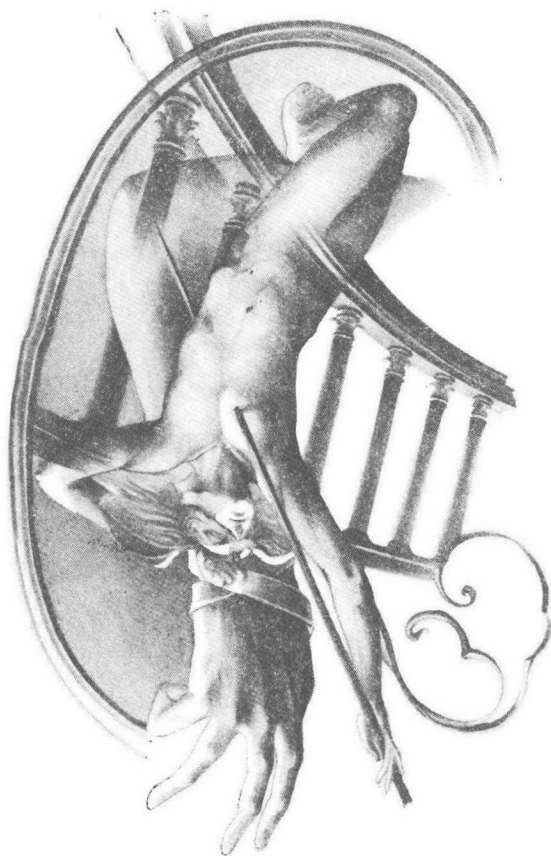
同 あとがき

272 195

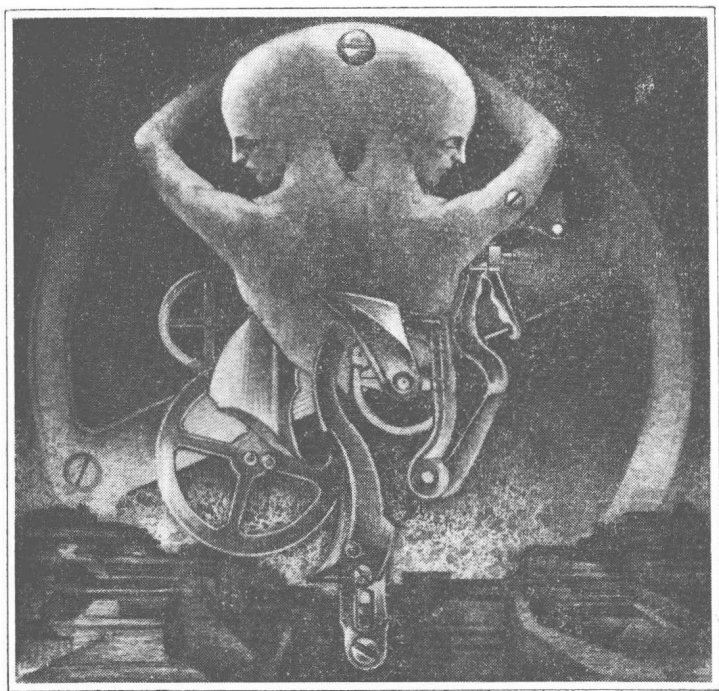
後記 275

画・装釘
建石修志

蒼白者の行進



序
章



月蝕の狙撃者

並木橋を渡りながら眺めただけでは、渋谷川には少しばかりの黒い水が溜っているとしか映らないが、近寄って覗きこむと、投げこまれた屑新聞や段ボールの箱やジュースの空き罐などを動かすほどではないにしても、まだ卵の殻ぐらゐは運べそうに細流さいりゅうれていることが判る。水もそれほど濁ってはいない。ここに巣くっている鳩や雀たちにとっては、これも大事な餌場であり水飲み場でもあって、どぶ泥で同じように黒く羽を染めてまでと思えるのは、西陽の逆光のせいなのである。左は東横線だが、下は羽目板やブリキを打ちつけただけの倉庫や住居が、佻しく窓に白シャツをさらし、右は同じく川縁の石垣に続いてビルがそそり立って、思い思いの高さと形で影を落している。その、いかにもちぐはぐな、まるで後から後からと継ぎ足しては作りあげたような建物の不均衡さは、駅周辺に及ぶほど目立って、渋谷の町は、いま、さながら巨大な積み木の城であった。

並木橋から駅にかけての表通りは賑やかな商店街で、とりわけ日曜は馬券売場に群がる人々が

わらわらと車道にまで溢れ出す。あらかたはそのまま馬券を握りしめたほどの顔つきで天井棧敷館の前を過ぎ、高速三号線の下にかかる大歩道橋を渡って駅までの黙々とした行列を作るのだが、近くの喫茶店でテレビを前に粘り続け、夕景、祝い酒・自暴酒こもごもに向いの甲州屋酒店の立飲みに駆けこんで、中には歩道に空き箱を持出し、ビールの泡に口を濡らして喋り続けるという連中も稀れではない。

だが、川ひとつを隔てた、東横線と国鉄線との間の路地は、そんなときにもまず人気がない。執拗に低く射しこんでくる西陽に照らされているのは電工関係の倉庫だの冷凍食品の営業所だのデパート専属の運送店に機械工場というところだが、そのひとつ、デパート展示専門の宣伝装飾社から、うつむき加減に出てきたのは藤川雅志であった。いくぶん猫背気味なのかも知れない。お先にといい低い眩しが聞えたとも思えなかったが、暗い内部からは、お疲れさんという威勢のいい声が飛んだ。

ひとりになると、それまで心に思いついたものがようやく流れ出す。ことに人の気配がない灰いろの谷間のようなこの路地は、裏側ばかりの街の裏の凹凸をなぞって歩いているようで、どこかひどく奇妙なところへ抜け出てしまいそうな予感があった。時間もここでは急にうねりを遅くし、ゆるやかに凝固してゆくような気がする。雅志は手首をかざして腕時計を見た。案の定、金いろの秒針はそのとき二、三秒あと戻りをしかけていたが、見られたと知って、慌ててまた律儀に急いで右へ廻り始めた。

左手の国鉄線を越えて、桜ヶ丘の高台が眺められる。そこには彼が唯一の憩い場所に行っている酒場「彩」があるのだが、この時間ではまだ開いているとも思えない。ママの朱麗はゆつたりと湯槽に浸っているころだろう。それはいちめん白緑に磨かれたタイルが鏡に映える浴室で、湯気のなかに女体はただならぬ白さを見せ、巨大な月の暈のように滲んでいる。浴槽の湯が透明なさざ波を立てて流れてゆく床の上には、奇妙なことに生まれたての赤ん坊が投げ出されて醜く短い四肢をひらき、けんめいにもがいているのだが、よくよくその顔に眼をとめてみると、それはまぎれもない自分なのであった。……

朱麗への思いは、そのまま姉の真美への思いに繋がっている。国見山の山ふところで独り病いを養っている姉は、いつでもほっこりと白い顔を浮かびあがらせ、それはまたいつでも泣き疲れた顔のように思えた。いつかは必ず同じ病いが自分を冒すに違いない。その、ついの果てである崖の上に立ったとき、いったいどのような「無」を眺めることが出来るのだろうか。崖までの細い径の途中には、きまって樾か櫟の林があり、惨劇はそこで行われるに違いないことを雅志は知っていた。遠い過去に、海に面した明るい蜜柑林で甘美な犯罪が遂行されたように、近い未来にもこの上なく情緒的な、優しい犯罪が行われることは、いまからもう疑う余地はなかった。それを最後に見守るのは、たぶんあれに違いない。ビルのあわいから明治通りに出て、高速三号線の威圧するようなコンクリートの高架を見上げながら、彼はなおその先の虚空に、確実に存在する筈のそのものを思った。

La batiée. 砂金を洗う木製の皿。

その浮かんでいる、遠い空間。

その木肌に砂金はまだ僅かこびりつき、それでもなお燦めいている。それは、真昼の星のように雅志の心に映じた。なんという不確かな釣合いを保って、危うく空にかかっていることだろう。たぶんその空には、眼に見えない絶巔に似た何かがあって、木皿はようやくその端に停まっているにすぎない。いまにも滑り出し転落する予感を孕みながら、まだそれが存在する限りは生きてゆかねばならないのだ。

昨年の七月一日、天文時の誤差を原子時に合せるため、八時五十九分から九時までを六十秒でなく六十一秒にしたときから、何かとんでもない異変が起き始め、その余分な一秒に誘われてこんな妙なところに来てしまったのだろうか。雅志はもう一度腕時計の秒針を眺め、ガラスの檻に捉われた金いろの囚人をいとおしんだ。それとも一月三十日の日曜、皆既月蝕の夜から何かが変わったのか。その夜は渋谷公会堂で天井桟敷の『邪宗門』公演が一日だけあり、もともと宣伝装飾社などは辞めて、早く舞台装置を手がけたいと希っている雅志は、朝日の記事でそれを知って観に出かけたのだが、一日だけというせいもあったのだろう、駅までも続くかと思われる凄まじい行列で、とうてい入れそうにもない。時間を過ぎても入口は開かれず、広場を埋めつくした群衆の黒い熱気に気押されて東の空を眺めているうち、静かに天体のドラマのほうが始まった。左下から斜めに初齣しよきとなって、『邪宗門』を諦めて友人たちと、月蝕を看にどこかで一杯飲もうと東

急プラザの近くまでくると、東急百貨店の上で月面の地球の影は暗緑色に美しく輝いた。ことに食既から生光にかけて、本影は赤銅いろに変わり、さらに甦ろうとする月の強烈な黄は鮮やかに眼を射た。そのひととき、雅志もまた月蝕の狙撃者だったに違いない。

狙撃者か——。なおどこへ行こうという当てもないまま、歩道橋の下に佇んで雅志は奇妙な笑いを洩らした。己はこうしてぼんやり突っ立っている、いわば佇立者だが、日本語にそんない方はない。局外者、犯罪者あるいは愛好者、愛国者といったいい方に倣えば、煙草好きは愛煙者、犬好きは愛犬者でよさそうなものだが、これは愛煙家、愛犬家というもったいらしいことになるのはなぜだろう。まあ己は何にしても「家」なんぞでなくていい。かりに絵描きになれたって画家ではない、画者で結構だ。そして何よりも凝視者であり、さらに永遠の憧憬者でいられればそれで満足なんだが。

ふたたび、九州の山の中におきさらされている姉の白い顔が眼に顯った。

——ぬしに逢うごたあ。

同時に、悲鳴に近い囁きが耳もとを掠めて過ぎたが、雅志の姿は、そのときもう歩道橋を昇る人混みの中にまぎれていた。

猿楽町の奥まったアパートを出て、鶯谷町の入り組んだ路地を逆に逆にと伝わり——というのは、ここいらの複雑な地形のせいで駅に近づくとうすればするほど遠廻りになってしまうためだが、ようやく国鉄の線路に平行する桜ヶ丘の下通りまでくると、溜り場になっている「彩」はもうほど近い。このごろしばらく御無沙汰しているだけに、薔人は何か安心した気になって歩みを遅くした。羚羊^{かもしか}めいた脚に細身のジーンズ、ひよわな胴にうす青のＴシャツがかぼそい首をつなげている。十四歳でも十九歳といっても通用するに違いない精巧な自動人形^{アンドロイド}で、これは彼の確信でもあった。製作者の好みであろう、長い睫毛と朱唇も忘れてはいない。無限に二十歳に近づきながら、決してそこには到達しない誇り。薔人は早く役者になりたかった。テレビに呼んで貰えればなおありがたい。でなければメンズファッションの店のウインドに、マネキン代りに立っていた方がいいのだ。舞台でもブラウン管でも飾り窓でも、とにかくなんらかの枠がありさえすれば、自分の美しさがいつまでも驚くほど変らないことに誰もが気づくだろう。千秋薔人という自然に付いた名も、永遠の少年にふさわしい。薔人は「ばらと」と読ませるつもりでいるが、それもひどく小粋に思えた。

薔人の歩いている通りはもう一つ下の、線路際の道と平行しているが、そちらを通るのは嫌이었다。緑いろの山の手線がすぐ傍を通りすぎると、それだけで風に飛ばされそうな気がする。それに、こちらの通りには、自然食レストラン天味、中華の弥彦軒、三軒ほどビルの事務所が続いた先は麻雀サロン虹、スナックのシルバー8、サバールーム愛殿留、天布羅の万喜、サパーク

ラブ夜汽車、バーあかしや、東京キッドの岐れがたむろしていたスナック天狗山、さらに、さかえ・とと・あかねといった小料理屋が軒を並べているのが便利だったし、いまごろになると左手の石垣に純白の皐月さつきが零こぼれるほどに咲くのも楽しかった。その白い花片は、手に触れたらさぞ冷いだろうと思われた。

ビューティセッコを過ぎてサクラヤビルの角までくると、道は急に展ひらける。もうそこは駅の南口に近いので、明治通りと交差し、ガードの上下を突っ切ってきた高速三号線とその下の国道二四六とが、おびただしい車の奔流を現前する。渋谷は、名のとおり谷の町なので、道玄坂・宮益坂を初めとする数知れぬ坂がその窪みをめがけてなだれこみ、車はまたその坂のことごとくを馳せ降り走りあがって途切れることがない。いきおいそこには大きな歩道橋が架けられ、歩行者はいやでもそれを渡らなければ駅には近づけない仕組みになっている。

アンドロイドとはいっても、多少とも人間らしく高所恐怖症の感覚を具えた薔人は、この歩道橋というのが大の苦手だった。渡ろうか、どうしようというように交通公社の傍でしばらく佇んでいたが、まだ開いてはいないだろうけれど、もしママの朱麗が来ていたら珈琲でも淹いれてもらおうと思って、そこからまた左へ切れあがった坂の中途にある“彩”へ向った。しかし厚い木彫りの扉は固く閉ざされて動こうとしない。薔人は小さく唇を噛んだ。

童貞を捧げるといい方なら、永遠に美しい母というイメージの朱麗とそうなりたかったのだが、実際にその教育を施したのはべつな三十年輩の夫人だった。しかし折角の肝入りもアン